

<2017年5月(通算249回) 月例会報告>

NPO サロンの事業を考える③ —月例会—

中塚 義実 (NPO 法人サロン 2002 理事長/筑波大学附属高等学校)

- 【日 時】2017年5月25日(木) 19:00~20:30 (終了後は「景宜軒」にて懇親会 ~23:00 ごろ)
【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室 (〒112-0012 東京都文京区大塚 1-9-1)
【テーマ】NPO サロンの事業を考える③—月例会
【演 者】中塚義実 (NPO 法人サロン 2002 理事長/筑波大学附属高校)
【参加者(会員・メンバー) 5名】
川名紀義 ((株)ピージー)、岸卓巨 (日本スポーツ振興センター)、笹原勉 (日揮(株))、嶋崎雅規 (国際武道大学)、中塚義実 (筑波大学附属高校)
【2次会からの参加者】
安藤裕一、小池靖、竹中茂雄
【報告書作成者】中塚義実

<目 次>

はじめに

- I. サロン 2002 発足以前
 1. 「サッカー研究会」と「社・心グループ」
 2. 三菱養和会「スポーツいんろう」
 3. 東京都高体連サッカー科学研究会
 - II. サロン 2002 の誕生と月例会
 1. サロン 2002 の誕生—「社心グループの皆さまへ」平成9(1997)年3月26日付文書
 2. 創設期の様子—年表&1997年5月6日(p.3)、9月10日(p.4)、11月3日(p.5~6)文書
 - III. 月例会にみるサロン 2002 のあゆみ
 1. サロン 2002 の組織づくり①月例会改革—1999年2月16日 (p.7~10) 付文書
 2. サロンの組織づくり②会員制導入—1999年12月31日 (p.11~) ~2000年3月23日 (~p.20)
 3. 月例会とプロジェクト—NPO サロン HP「アーカイブ」より
 4. 2002年 FIFA ワールドカップ後のサロン 2002—NPO 法人化まで
 - IV. ディスカッション
 1. 月例会の位置づけとサロン 2002 の性格
 2. サッカー以外のスポーツの話題
 3. 20周年記念シンポジウムと広報誌について
- 別紙資料：20 ページの文書集

はじめに

「NPO サロンの事業を考える」シリーズ第3弾です。

1997年に「サロン2002」を名乗って以降、ほぼ毎月開かれてきた月例会。サロン2002の中核事業が来月で250回を迎えるのを機に、月例会そのものにスポットライトを当て、月例会の20年から見えてくるものを共有し、今後について意見交換したいと思います。

タイトルからは「過去志向で内向きの」話題のようにみえるかもしれませんが、そうではありません。月例会テーマの推移からは日本のサッカー界、スポーツ界の激動の近代史を知ることができ、スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”についてのヒントでいっぱいです。またサロン2002そのものの推移、すなわち任意のネットワークからNPO法人化に至るまでのプロセスは、社会の変化と人々の意識の変化を考える手がかりとなり、これからの方向性を探る上で有益です。

これからの月例会について、あるいは来月に迫った「20周年記念シンポジウム」についても意見交換できればと考えます。

【参考】サロン2002月例会で取り上げられた「月例会」の話題（2000年度以降）

- 2013年4月 中塚義実「サロン2002のこれまでとこれからを語ろう
ーサロン in 臼杵&公開シンポ in 名古屋 月例会200回を振り返って」
http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2013/2013-4.pdf
- 2009年4月 中塚義実「サロン in 熊野報告&月例会を考えるー月例会150回記念企画」
http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2009/2009-4.pdf
- 2007年2月 「サロン10周年記念パーティーーサロン2002の10年間を振り返る②」
http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2007/2007-2.pdf
- 2006年12月 中塚義実「サロン2002の10年間を振り返る①ー10年間（10年以上）の環境の変化とサロンの変化」 http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2006/2006-12.pdf
- 2005年3月 「サロン2002のあゆみーサロン2002月例会100回記念パーティー」
http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2005/2005-3.pdf
- 2004年2月 「いまいちど「サロン2002」のあり方を考える」
http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2004/2004-2.pdf
- 2003年6月 月例会活性化委員会「サロン2002の月例会を活性化するには」
http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2003/2003-6.pdf
- 2003年5月 笹原勉「GE社の「シックスシグマ」手法を用いたサロン2002の課題の検討」
http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2003/2003-5.pdf
- 2002年3月 ワールドカップ・プロジェクト2「ワールドカップの“物語”をいかに集めるかー2002年（以降）のサロン2002を考える③」 http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2002/2002-3.pdf
- 2002年2月 「2002年（以降）のサロン2002を考える②」
http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2002/2002-2.pdf
- 2002年1月 「2002年（以降）のサロン2002を考える」
http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2002/2002-1.pdf
- 2000年3月 中塚義実「サロン2002：Ver.2000～2001」
http://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2000/2000-3.pdf

I. サロン 2002 発足以前

サロン 2002 が生まれる前、あるいは誕生前後については、2006年12月の月例会「サロン 2002 の10年間を振り返る①－10年間（10年以上）の環境の変化とサロンの変化」がわかりやすい。

1. 「サッカー研究会」と「社・心グループ」

1964年の東京オリンピックのころにできた、日本サッカー協会（JFA）科学研究委員会（1980～90年代は戸荻晴彦委員長）は、代表チームの体力測定やゲーム分析を中心に活動していた。そのメンバーが月2回、都内の大学に集まって、互いの研究を紹介したり海外の文献を読んだりする勉強会「サッカー研究会」を開いていた。1984年に大学院生となった私（中塚）はひょんなことからこの研究会の存在を知り、筑波からのこのこ出かけるようになっていく。

はじめてこの研究会に参加したとき、会場は東大駒場キャンパスのどこかだったと思うが、いま大東文化大学におられる大橋二郎氏（当時は東大助手）が「選手の移動距離と移動スピードの研究」を報告された。そのころ選手の移動距離は、画板に用紙を置いて手書きで軌跡を描く方法が主流だったが、大橋氏はタッチラインの両端にビデオカメラを設置し、一人の選手を2台のカメラで追い、三角法を用いて距離と速さを測定するシステムを開発し、論文にまとめられていた。当時としては画期的だっただろうし、「数学で習ったことがサッカーに生きる」ことがわかった私にとっては、サッカー研究の面白さに触れた瞬間でもあった。

この研究会はどちらかというと体力測定やゲーム分析が中心だったが、社会学や心理学に関心を持つ人たちも何名かおり、その人たちが中心となって、夏休みに開かれる小・中・高の各年代の全国大会出場チームを対象に活動実態調査を行っていた。そのグループははじめ「調査班」と言っていたが、のちに社会学と心理学の頭文字から「社・心グループ」と呼ぶようになり、こちらも不定期に勉強会が開かれるようになる。1987年4月に筑波大学附属高校に着任したころ、社・心グループの会合は、筑波大附とは道路をはさんだ隣にあるお茶の水女子大学の杉山進研究室で開かれるようになっていた。

1991年2月11日の第11回サッカー医科学研究会は、大きなトピックであった。JFA 科学研究委員会とスポーツ医学委員会が共同で主催するこの研究会も10年が経過し、今後の方向性を議論していた。プロ化の検討が進んでいたその頃は、「2002年 FIFA ワールドカップ」の招致活動も始まり、日本サッカーが大きく動き出すときであった。「2002年 FIFA ワールドカップ」を正面から取り上げるシンポジウムを提案した私は、裏方として企画・運営にあたることになった。代表監督の横山謙三さん、プロ化の責任者である川淵三郎さん、そして関西から大阪商業大学の上田亮三郎さんにお越しいただき、戸荻晴彦 JFA 科研委員長の進行で開かれたシンポジウムは刺激にあふれるものであった。2002年を正面から取り上げたシンポジウムは、おそらくはじめてではないだろうか。この数日後、サッカーのプロリーグについて記者発表が為されるタイミングでもあった。このシンポジウムに「陰のフィクサー」として関わることができたのは光栄であったし、その後の動きにつながるものであった。

2. 三菱養和会「スポーツいんろう」

このシンポジウムの翌年から、巣鴨の三菱養和会で「スポーツいんろう」という名の勉強会がはじまった。代表監督は横山さんからハンス・オフトに代わり、横山さんは三菱養和会巣鴨スポーツセンターの長として、今度は地域に根差したスポーツクラブの経営を担うようになる。それまで代表監督をされていた方だからこそ、「文化としてのスポーツ」の重要性を強く感じられたようで、当時サッカー研究会にいたメンバーに声がかかり、第1回目の勉強会が開かれた。テーマは「スポーツとは何か」。その後、「チームとクラブ」「プロとアマ」「選手と指導者の資質」「スポーツとメディア」など、私が日頃から問題意識を持っていたことが取り上げられ、幅広い方々と意見交換する機会が毎月持てたこ

とは大きい。もちろん社・心グループの人もこれに深くかかわっていた。

「スポーツいんろう」は6年間、71回開かれたところで閉会となった。養和会の方針だったと思う。1997年初めにまとめの報告書を作った。そこには、前年から始まったDUOリーグの取り組みが紹介されている。

「スポーツいんろう」と「社心グループ」は明確な会員制組織ではなかったが、ロコミで仲間が広がり、研究者以外でサッカーに関わる方々が少しずつこれらの会に参加するようになった。これが1993年のJリーグ補足前後のことである。

3. 東京都高体連サッカー科学研究会

同じころ、東京都高体連サッカー専門部の中でも任意の研究会が始まる。言い出しっぺは喜熨斗勝史氏。いま中国リーグでストイコビッチ監督のもとでコーチをしているが、当時は都立杉並工業高校の教員で、私とは東京教員クラブのチームメートである。東京教員の活動の合間、スポーツ科学の話などで盛り上がる仲間であったが、そのうち彼が、教員を続けながら東京大学の大学院に通い始め、スポーツ科学の勉強を本格的に始めるようになる。

その彼が、高体連の中で研究会を作ろうと言い出した。当時すでにJFA科研の一員としてさまざまな活動をしていた中塚と、博士号を持つ高校教員・小澤治夫氏（当時筑波大附属駒場中高）に声がかかり、3人が発起人となって東京都高体連サッカー専門部の方々に声をかけ、1995年度より「東京都高体連サッカー科学研究会」がはじまった。私は当初は「巻き込まれた」意識でいたが、毎回テーマを決めて案内を出し、研究会の運営を担っていたのは私である。ほぼ毎月、月例会を開き、2005年度末の第99回月例会をもって閉会となった。ここがユースリーグを全都～全国展開する上で欠かせない意見交換の場となっていたが、複数の研究会を主宰しているところらも時間のやりくりがつかなくなる。最後の方はいろんな研究会と重ねながら行っていた（サロンの月例会兼高体連サッカー科学研究会といった形）。このような事情が閉会の一因ではあったが、もう一方で、東京都高体連の中に「研究部」が明確に位置付けられ、そこが研究活動を担うようになったことも、サッカー専門部内の任意の研究会が終わった要因として挙げられる。ちなみに、新設された研究部に、サッカー専門部から選出されたのは私であり（いまはサッカー専門部から4名）、その後、全国研究部の仕事に突き進んでいくことになるが、この頃ははまだそんなことはまったく想定していない。

ここまでがサロンの前史の、外枠の部分である。

岸：高体連の研究会は、高校の先生が集まっていたのですか？

中塚：高校の先生や卒業生のコーチ、あとは個人的なつながりで来ていた人もいた。この研究会に顔を出した人を社心グループに呼ぶこともあった。

嶋崎：ラグビー専門部でも同じころ、似たようなことをやっていた。技術・戦術、コーチングの方法などが毎回のテーマだった。

中塚：高体連の研究会で「へーっ」と思ったのは、例えば高校生生活調査をメンバーの学校で実施して比べてみたときのこと。部員に1週間の生活記録をつけさせて集めたのだが、うちの学校では部活後に塾へ行く者が多数おり、9時すぎに塾が終わって帰宅は10時すぎ。それから夕食。これでは強くなるわけがない。トレーニング後、理想を言うと30分以内に栄養を取りたいが、実際はこれだけ時間がある。「うちも同じだ」というのはある底辺校の先生。「うちの生徒は部活後にバイトへ行く。帰宅は10時過ぎでそこから食事」。ああいっしょやな、もっと栄養のことをやらなあ

かんなどということになり、スポーツライフマネジメントの話にがり、ユースリーグの話につながっていった。

嶋崎：小沢先生はそういうことをいろんなところに書かれている。

岸：その頃はメールはなかったのですか？

中塚：使っていなかったと思う。高体連の研究会は、うちの学校の印刷機でハガキでの案内を印刷して毎月送っていた。年度初めの総会のときに、案内をほしい人（これが会員）から1,000円ずつ集め、ハガキ代とした。毎回100通ぐらい送っていたと思う。「スポーツいんろう」は三菱養和会から郵便物が毎回届いた。

嶋崎：いまから思うと、高体連のラグビー研究会は、トレーニング方法や技術・戦術の話ばかりやっていたから発展性がなかった。社会的なことを考えていなかったのはサッカーとの大きな違い。それと、ラグビーの場合は高校選抜を頂点とする強化の仕組みができて、勉強会でともに学んでいた人にコーチの要請が入ってどんどんそちらへ人を持っていかれてしまった。もっと上のところで組織的な研究が始まり、高体連の研究会はなくなっていった。もっと底辺のところを見据えてやっていくべきだった。高校生の生活調査をやったこともないしリーグ戦の話にもならない。毎回技術・戦術・トレーニングの話に終始した。

中塚：サッカー科学研究会も、初期のころは同じ。やはり現場の指導者の興味は、日常のトレーニングの話に向かう傾向がある。実技研修も結構やった。その中で栄養の話を含めたスポーツライフマネジメントの話になり、リーグ戦の話につながっていった。1990年代終わりごろは、サロン2002とも連動して、ユースサッカーリーグをどのように展開していくかが大きなテーマとなった。それぞれの研究会を別個にやっていくのは時間的にも難しいので、高体連の研究会とサロンの月例会を兼ねて開催し、高校の先生方が、学校以外の方と接する機会を設ける機会を意図的に作っていた。

II. サロン 2002 の誕生と月例会

ここからは別紙資料と年表をご参照いただきたい。

1. サロン 2002 の誕生—「社心グループの皆さまへ」平成 9 (1997) 年 3 月 26 日付文書

当時のメンバーにメールで送った文書がある (p.1~2)。この投げかけを踏まえて、1997 年度より「サロン 2002 の月例会」が開かれ、新たな歴史が始まる。

「1. 社心グループのはじまりについて—実働部隊としての機能」には、社心グループが研究活動の実働部隊として機能していたことが書かれている。確かにそうで、1997 年度も日体協のもとで JFA 科研の事業として進めていた「サッカータレントの発掘方法に関する研究（全国の指導者にインタビュー）」や、「地域における一貫指導システムの構築に関する研究（磐田市のフィールドワーク）」など、JFA から予算をもらってやっていた。今後も実働部隊としての社心グループの機能は残っていくだろうと述べている。

一方で、「2. 月例会について」には、参加者のレベルアップを目指して月 1 回の勉強会をするようになったが「定例でやっているうちに話題は多様化し、それにもない仲間が仲間を呼び、気がつけば職種を越えた多種多様な方が大勢集まる非常に珍しい、楽しい会に発展していました」とある。こ

のあたりが、社心グループの勉強会から次の段階に向かう動機となった。

「3. 平成9年度へ向けて」と題して、「実働部隊としての機能と、月1回の情報交換会を共存させながら、両者の質を高めていくことがこれからの課題です」として、次の提案をしている。

- 1) 情報交換会は従来通り続ける
- 2) 情報交換会の名称を、社心グループとは別に、何か気の利いた名称に変更したい
- 3) 日程と場所を固定したい…この段階では毎月第3金曜日、お茶大の杉山研究室
- 4) 実働部隊としての「社心」グループは存続する…プロジェクト（この段階では研究プロジェクトを指す）ごとに人集めをして取り組む

2. 創設期の様子一年表&1997年5月6日(p.3)、9月10日(p.4)、11月3日(p.5~6)文書

このような投げかけに対してメールや電話で意見交換し、「サロン2002」という名になった。5月6日の文書には、次の一節がある。

昨年度、「社心グループの定例会」として行っていたものを、本年度は発展的に解消し、新たに「サロン2002」という名称で、毎月第3金曜日の夜、6時半~9時まで、お茶の水女子大学で行いたいと思います。旧社心グループへの参加者の方はどうぞお気軽にサロンへ遊びに来てください。

当面、2002年までの期間限定的活動ということになりますが、ここでいう「2002」は、その後のあり方も含めたものとしてとらえていただきたいと思います。基本的には情報交換会ですが、このサロンで得た情報やアイデアは、それぞれの現場で大いに活用していただくことと、できれば何らかのメディアに載せて広く伝えていきたいと思っています。

年表にある第1回月例会は4月18日。このとき3本の話題があった。当時大学院生だった高橋義雄氏の「日本サッカーにおけるナショナル・アイデンティティの確立に関する研究」も、中塚が紹介した「韓国社会と2002年ワールドカップ」も、いずれも3月にあったスポーツ社会学会の報告である。「スポンサーの立場からみた巨大スポーツイベント」を発表した榎竜一氏は、筑波大学の体育研究科を修了し、同研究科の研究生であったが、ご自身の修士論文を報告してくれたと記憶している。

このように、研究者の集まりという性格は維持しつつ、テーマには時事ネタも含まれる。5月16日の第2回月例会のメインテーマは「サッカーくじ」。高橋義雄氏と三堀潔貴氏が話題提供した。高体連サッカー科学研究会からサロン2002に来るようになった三堀氏は地理の教師であり、「サッカー地理学」を授業で実践されている方である。

第3回（6月20日）は、仲澤真氏が海外の視察報告も含めた「観戦文化に関する調査報告」をする予定だったが、台風により中止。「来てしまった人はそのままカリンカへ」ということが年表に記され、1回にカウントされている。

第4回（7月18日）はお茶大で仲澤さんの報告。そして夏休みに突入する。

この年にJヴィレッジができ、白馬や河口湖で行われていたU-15とU-18のクラブユースの大会はJヴィレッジに移った。そのU-15大会初日の夜、サロンの月例会が「合宿」として行われた。社心グループ時代に伊豆の今井浜で「合宿」と称して海水浴と懇親会を楽しんだことはあったが、これがサロン2002としての初合宿である。最後の方は缶ビールを飲みながらであった。4ページの資料をみると、「10名（+2家族）の参加者」とある。井上俊也さんのご家族も参加されていた。

この頃は1998W杯予選のまっただ中。サロンの月例会は第3金曜日に行うことにしていたが、9月の第3金曜日はUAE戦当日だったので開催日を変更し、会場も筑波大附属高とした。テーマは「2002年ワールドカップの練習会場について」。Jヴィレッジの合宿で井上俊也さんがフランス大会のキャンプ地の話をされたのだが、2002年の開催が決まっている日本では、キャンプ地の話題はほとんど出て

いなかった。そこにいち早く目をつけたのがわれわれサロンである。高知県サッカー協会副会長で、テレビ畑ご出身の宮村剛さんにお越しいただき、高知県の姿勢を伺い、キャンプ地に立候補するにはどうすればよいかについての「作戦会議」となった。しかし最終的には、高知県が FIFA ワールドカップのキャンプ地に立候補することはなかった。「2002 年は高知国体があるから」である。当時、成田十次郎先生が高知県サッカー協会長をされていたのだが、県の意識はそこまで向かなかったのである。結果的に、中四国は開催地に選ばれることもなく、日本列島の中でこの縦軸がまっさらになってしまった。惜しい。

第7回(10月17日)は「サッカーを取り巻く職業についてープロ選手のセカンドキャリア問題を考える」と題して、できたばかりのJリーグ選手協会の広報誌を編集されていた大場淑子さんに報告していただいた。

そして第8回(11月21日)に、はじめて「ユース(以下の)年代のサッカーを考える」を取り上げた。話題提供者は中塚で、これ以降何度かこのテーマを取り上げられている。ちょうどこの頃、私はJFAの第2種検討委員であり、JFA ニュースに「ユース年代のサッカーはいま」と題する連載をしていた。月例会では、Jリーグ発足以降のユース年代に関する調査報告や、1996年度に始まったDUOリーグのこと、それを全都展開、全国展開しようとしていることなどを紹介し、ざっくばらんに意見交換した。高体連サッカー科学研究会と兼ねて開催していたのはこの頃のことであり、学校の先生に、学校外の人たちの接する機会を設けようとしたのは前述のとおりである。

5ページの1998年11月3日付メールには、「問題提起ー“サロンの法人化”へ向けて」が出てきている。いまは廃刊となっている『学校体育』という月刊誌にサロン2002の紹介記事を掲載し、早くも「NPOとしてのサロンの法人化を検討中です」と述べた。サロンのネットワークはどんどん巨大化し、運営が大変になってきたことや、サロンの可能性をもっとアピールしたいということから出てきたものである。法律ができたばかりのNPOを視野に入れていた。1999年1月29日には、当時一橋大学の院生だった松下徹氏が「NPO法について」、中塚が「サロン2002のこれまでとこれから」について語っている。

6ページ。1998年11月4日付で「緊急サロンのご案内」がある。横浜フリーゲルズがなくなるといふときに、「サロンで何かできないか」ということで、その2日後に集まったものである。

岸：この頃って毎回何人ぐらい来ていたのですか？

中塚：20人ぐらい来ていたと思う。

岸：けっこう顔の知れた人が来ていたのですか？

中塚：そういう人もいるけど、いろんな人が来ていた。お茶大からうち(筑波大附)へ会場が移った背景も一つはそこにある。初年度の9月18日から、会場は筑波大附になった。女子大に得体のしれない人たちが20人もやってくるのは、杉山先生からするとやりにくくなってきたようだ。いまから思うと通産省のお役人だった平田竹男さんや、先日亡くなられた広瀬一郎さんも常連だった。

岸：濃いメンバーが集まっていた。

中塚：そう。こういう話をする場がここしかなかった時代。だからいろんな人が集まってきた。

Ⅲ. 月例会にみるサロン 2002 のあゆみ

1. サロン 2002 の組織づくり①月例会改革—1999年2月16日 (p.7~10) 付文書

前述のとおり、1999年1月29日の月例会のテーマは「NPO法について」。一橋大院生だった松下さんが、できたばかりの法律の解説をするという挑戦だった。参加者にはNPO法でクラブづくりをしようとする現場の当事者がごろごろいる中で、松下さんは相当苦戦されていた（いまもトラウマ?）。

私からは「サロン2002のこれまでとこれから」について語った。このときの意見交換を踏まえてつくったのが、「サロン2002のこれから（案）」と題する7~10ページの文書。そこには「法人化について」「会員制について」「月例会について」が記されている。

1. サロンの法人化について

時期尚早であるが今後も検討を続ける

2. 会員制について

- 1) 1999年度より会員制をとるべく準備を進める…会員資格、年会費など
- 2) 1999年7月までに「サロン2002名簿」を作成する
- 3) サロンのメーリングリストを開設し、会員が情報を共有できるようにする

3. 月例会について

- 1) 月例会はこれまで通り、誰でも参加できる自由な情報交換の場とする
- 2) 2月より月例会参加費を徴収する。参加費は1,000円
- 3) 参加費の使い道…謝金、実費、事務局経費など
- 4) 月例会の様子はテープに保存する

ここでの提案は、その後、ほぼ実現していく。

このころ情報はEメールで配信していたが、受信できない環境の人もいて、その人はFAXを受信先としていた。その場合、1枚につき40円ほどかかっており、それを私が自己負担していたのだが、「それはよくない」ということが参加費徴収の根拠の一つとなった。会員制導入の際には「Eメールで情報を受信できることを会員資格に入れてはどうか」との議論もあったが、当時134名中48名はFAX受信で、これを会員資格とすることはメンバーの切り捨てにつながると判断し、この段階では「努力目標」に留めることとした。

2. サロンの組織づくり②会員制導入

—1999年12月31日 (p.11~) ~2000年3月23日 (~p.20)

1999年度は、「草サッカーはいま」で浜村真也氏が登壇したり、番外編でスコットランドの社会学者、ムアハウス氏をお迎えし、JFAと日本スポーツ振興センターで情報交換会を開いた。新潟、掛川への「出張サロン」もあった。7月のスポーツ産業学会では、ネット型の新しい「マルチスポーツクラブ」（「総合型地域スポーツクラブ」をこのように表現することもあった）の事例としてサロン2002が紹介された。2002年を前にして、サロン2002の活動は勢いに乗っていた。

ノストラダムスが人類滅亡を予言していた1999年7月を無事乗り越え、2000年代に突入するまさにその直前（12月31日）に会員に送ったのが11ページの文書である。当時の様子がこの文書からうかがえる。

「サロンのメジャー化」ということを数年前から言っていましたが、時代がサロンをメジャーな舞台に押し上げていく様子が、今年1年を振り返るだけでもよくわかります。この組織をどうやっていくのかは、そのまま日

本のスポーツ界の方向性の指針ともなるでしょう。以下の4点を軸に、皆さんもサロンの当事者として、ソーゾー（想像・創造）力を駆使してイメージをふくらませておいてください。

1. 続けるために…事務局機能の強化と財源の確保
2. 広げるために…広報＝インターネットと出版活動／“出張サロン”と全国各地の“サロン2002”
広がりに対するリスクマネジメント

3. 深めるために…メーリングリストの活用／サブグループの必要性／汗をかく事業
4. 活かすために…現場へのフィードバック／政策決定への関わり

今年1年かけて、サロンの今後をさまざまな角度から検討していきたいと思います。より良い組織にしたいと思いますのでご協力のほどよろしくお願い申し上げます。2月の例会で時間をとって検討する予定です（以下略）

このような問題意識を持って検討を開始した。メールのやりとりだけでなく、「将来検討会」の名で意見交換会（兼飲み会）を何度か開き、その経過を共有しながら組織化の準備を進めていった。その資料が13～17ページにある。

2月5日に日暮里駅前の居酒屋で、加納さん、川井さん、笹原さんが集まったのが13ページの第1回検討会。第2回検討会は2月18日、筑波大附の体育教官室で、内田さん、鶴木さん（横浜フューゲルス問題に尽力）、鈴木崇正さん、両角さんが参加。メール参加の井上さんの意見は興味深い。

（前略）まず、私自身「サロン」は前身の社心グループ時代の1996年3月にお茶の水女子大でスピーチを行ったことが最初のコンタクトでした。（略）サロンの存在は私にとって「刺激」となり「自信」となるものでした。

（略）私にとってサロンは「若手の活動する研究者がさまざまな分野の英知を集めて日本サッカーの発展に寄与していく」ということで私の持っている「ささやかな英知」も役に立って「貢献している」という満足感と、サロンのあとで繰り上げられる「サッカー談義」を楽しむという二つの喜びがあったわけです。

ところが、サロンから私が足を遠ざけることになる二つの参加者の変質が起きました。まず、サロンという媒体を「貢献するもの」と考えるのではなく、これを「利用する、営利活動に使う」という存在が現れたことです。「普通の研究者」や「普通の先生」や「普通のサラリーマン」が「日本サッカーに貢献したい」と考えて集まっているのに、逆にこの場を利用するものが出てきたのです。以前私は、サッカーは「宗教であり戦争である」と言いましたが、これは教会でみんながお祈りしているところや戦場で戦っている場で「弁当を売っている」ようなものです。

それからもう一つは、サッカー談義が中心になり、「お祈り」や「戦い」の部分がおろそかになり、「お祈りや戦争のあとのお食事会」に重点が置かれるようになってきたことです。「サッカーが好き」というだけの人たちとサッカー談義だけをやるのなら別にサロンでなくてもいいわけです。

この二つの参加者の変質が、私がサロンに足を運ばなくなった理由です。同じようなことを感じている人も他にいると思います（略）。おそらく私と同じような理由でサロンを去った人も多く、私がサロンに初めてうかがった際の方はほとんど残っていないと思います。そんな中で毎月会合をマネジメントされている中塚さんのご苦勞をサポートしてあげたい、ということで簡単ですが自分の考えをまとめました（以下略）。

このころ、井上さんの「第一次遠のき」があったようだ。「第二次遠のき」はNPO法人化の際にあったが、先月（2017年4月）久々に月例会に登壇され、メンバーに復帰されたのはご存じのとおり。

3月16日の第3回討論会（16ページ）では宇都宮さん、香西さん、島原さんが集まり意見交換。

そしてそれらを踏まえ、2000年3月27日の月例会で、「サロン2002 Ver2000～2001」と題して中塚が今後の方向性について話をした。事前にメンバーに送った資料が18～20ページのものである。

NPOサロンのHPの「ヒストリーアーカイブ」には、このときにつくった設立宣言と規約が掲載されている。1997年から「サロン2002」を名乗っているのに、設立宣言は「改めてこれを定めた」とし

た。ゆるやかな、しかし組織として最低限の要素を整えた規約は両角さんが原案を起草し、若干の修正を経て2000年4月1日付で確定した。月例会をはじめとする「活動」を説明する文書もつくった。これらがアーカイブとしてHPに載っているのでもておきたい。

3. 月例会とプロジェクト—NPO サロンHP「アーカイブ」より

HPのアーカイブに掲載されている「月例会」の文書は、いまでも生きているものである。今日のメインテーマは「月例会」なのでこのあたりが一つのポイントとなる。

月例会のテーマは会員が出し合う。メンバー外から演者を呼んできて活動を続ける組織もあるが、サロン2002の月例会は、会員の持ち回りが原則である。

「発言はできるだけ簡潔にお願いします」とわざわざ書いているのは、月例会を自己PRの場にしようとする人が、このころ少しずつ出てきたことに起因する。そのような人の発言は、自分のことばかり。だからこのような一文を入れている。

報告書のこと書かれている。この頃は全部私が作っていた。2時間のテープ起こしが2時間以上かかるのは当たり前だが、実際はいろんな仕事と並行しながら報告書を作っている。トータルするとどれくらい時間をかけているのだろうと考えたとき、実質作業時間（机に向かっている時間）は5時間ぐらいだと考え、時給1,000円で計算して5,000円とした。いまは報告書作成者を毎回募集し、仕上がった段階で5,000円を支払っている。この価格で約20年間、ずっとやって来ている。

やってみればわかるが、話し言葉を書き言葉にして小見出しをつけ、資料を添え、レイアウトをしてとやっていると5時間では終わらない。この価格で続けてきたのは奇跡に等しい。

笹原：今年度予算では10,000円にしている。

このときに「プロジェクト」も定義した。月例会は「情報交換の場」で「人との出会いの場」だが、何らかのアウトプットを出したいときは、希望者で集まってやってくれ、というもの。サロンの最初のプロジェクトは「フットサル・プロジェクト」。次に「ワールドカップ・プロジェクト」ができ、2002年に向けて何ができるか、あるいは2002年の物語をどう集めるかについて議論し、公開シンポジウムや、HPに物語を集めることが企画・実践された。

NPO法人となっただけでも、基本的にはこの姿勢は保持されている。よりプロジェクトに取り組みやすいようになったと言えるだろう。

4. 2002年FIFAワールドカップ後のサロン2002—NPO法人化まで

年表を追いながら、その後の動きをみていきたい。

まだ2000年ぐらいだけど、このあたりでサロンの姿が整ってきた。

2001年、2002年。ワールドカップめぐる話題が多いのは当然だが、同時にユースリーグの話題も何度かある。ちょうどこのころ、私自身はDUOリーグのムーブメントを全都、さらには全国へ展開することに本腰を入れて取り組んでいたことが、月例会テーマに反映されたようだ。こちらとしては当事者として抱える課題を皆にもんでもらいたいと考えていたのだが、月例会テーマがユースリーグに偏ることに違和感を覚え、離れていく人がいたのも確かである。

2003年5月には、笹原氏による「GE社のシックスシグマ手法を用いたサロン2002の課題の検討」があった。「月例会を活性化するには」というテーマもある。FIFAワールドカップ後に、サロン2002のような組織が各地にでき、サロン2002のあり方を、時代に即して見直していく必要性が生じていた。

2004年度末には月例会100回記念パーティが開かれている。

2005年の公開シンポジウムではクラマーさんをお招きした。

そして2006年にはついに海外で出張サロンを開催した。フランクフルト中央駅に集合してパブリックビューイングを経てアップルワインの店へ行った（もう1回はスポーツクラブ訪問）が、私は集合に1時間も遅れてしまった。ごめんなさい。

この頃、少しずつためていたお金がある程度まとまり余力が生まれ、サロンの業務で出かける場合の出張費を出せるようになっていた。しかし2007年度末から2008年度にかけて「出張サロン」をやりすぎて、またお金のない時代に戻っていく。

2009年度末の公開シンポジウムではじめてラグビーを取り上げ、その後も何度かサッカー以外のスポーツの話題が出てくるようになる。U-18フットサルの話や、歴史ネタもたびたび取り上げられた。

並行して、サロン2002の今後のあり方についての議論は総会や理事会で進めていた。2013年度には法人化プロジェクトが設置され、プロジェクトからの問題提起が月例会で何度か為された。それを受けて理事会で原案を作成、議論を続け、最終的には2014年5月31日の総会でNPOサロンが設立された。

ブラジル大会の日本の緒戦の前夜、2014年6月14日に、NPOサロンの1回目の月例会がフットボールサロン4-4-2で開かれた。テーマは「理事長が語るFIFAワールドカップ」である。

昨年度末からは「NPOサロンの事業を考える」シリーズを3回開き、本日が第249回となる。

ということで、ざっくりとはありますが、サロン2002のあゆみと当時の時代背景を、月例会を通して振り返ってみました。

IV. ディスカッション

1. 月例会の位置づけとサロン2002の性格

川名：サッカー協会との結びつきはけっこうあったんですか？

中塚：いまは直接的なものはないですね。けど今年の公開シンポジウムでは後援をいただきました。

この20年ではっきりしているのは、日本サッカー協会自体がちゃんとしてきたということです。Jリーグが始まる前は少人数のボランティアでやっていた協会が、いまでは200億ぐらいの大きな組織になっている。小さな組織でFace to FaceでやっていたころのJFA科研がルーツにあるので、他の似たような組織よりもJFAには近いと思います。

岸：月例会の演者はいまも持ち回りという発想ですか？

中塚：そうです。もちろん会員外の演者を排除するわけではないけど、演者が会員外の場合は会員がコーディネーターとなって、その人の責任で呼んでくる形をとっています。月例会で話をしてくれるような人は、サロンの“志”に賛同するはずだというのがあります。

笹原：逆にそういう人を呼ぶ、ということですね。

中塚：そうです。月例会でしゃべってもらった時点では会員ではなかったけど、月例会後に会員になるケースもけっこうありました。近いところで言うと、第239回の「ある女子サッカー選手の異文化体験」の野口亜弥さんは岸君の紹介で話をしてもらったけど、この時点では会員ではありませんでした。けどすぐにNPO会員になってくれました。

岸：いまあまり月例会に出てきてない方でも、名簿に載っている方にはぜひ今後発表してもらいたい

ですね。

中塚：それが会員からすると、この会に対する GIVE の一つになると思います。たぶん皆さんおもしろいことをやっておられると思うし。

笹原：1回も月例会に参加したことがない人もいますね。

岸：昔は参加してたけど、という人も大勢いると思います。

中塚：井上俊也さんもそうだし、長岡茂さん、香西武彦さんも復活しています。あの頃の人たちが徐々に戻りつつあるのもおもしろいですね。できれば今度のシンポジウムで、そういう人たちが集まるような仕掛けができるとなおおもしろい。

嶋崎：シンポジウムでは、社心グループを知っている人たち、この年代の人たち、NPO 法人化したいまのサロンとか、年代ごとに登壇していくのもおもしろい。

中塚：この20年間について、今日は主に月例会ネタで振り返ったけど、いろんな変化があります。サッカー協会がちゃんとした組織になっていったのもそうだし、通信手段一つとっても、ハガキを送っていたころから、メールを FAX で受信する人たちがいた問題、メールで送受信できることを入会の条件にしてよいかどうかという議論もあった。そういうのを経ていまに至る。このように、いろんな切り口でこの20年を見わたすことができる。

笹原：過去のメンバーだった人全員にシンポジウムの通知を出すという考えもある。ただし、サロンの方向性とは合わず退会した会員もいる。

中塚：法人化の段階で、議論のあとのお食事会がメインだった一部の人たちが離れていった。それもいいけど、20年の経緯、特に初期のころからの流れを考えると、彼らが提唱した「ゆかいな仲間たち」というだけではもったいないんですわ。

川名：基本となる考え方は2000年3月の「サロン2002の“志”」ですね。

中塚：そうですね。サッカーから始まっているけど、いまでは「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」としています。

2. サッカー以外のスポーツの話題

嶋崎：どこからほかのスポーツの話題が出てきたのかをみていたんですけど…

中塚：最初はラグビーの話じゃないですかね。

嶋崎：2009年度末に岩淵 GM を呼んで公開シンポジウムをやった。

岸：川崎競馬もありました。

中塚：2009年7月ですね。茅野さんが神奈川県で深くかかわっておられた。

笹原：サッカーが好きで、ここに集まってくる人が少なくなってきたような気がします。サッカーだけだと話題が少なくなってきたのではないかな。昔はもっといろんな話題が出ていたような…

嶋崎：それは逆じゃないですかね。サッカーを語れる場が増えたということではないでしょうか。いろんなところに分散していった。サッカーを好きな人は増えていると思います。

岸：発信できる場が増えたのもあるでしょう。ブログとか。

中塚：勝手につぶやけるわけやからね。だからわざわざ月例会で自己PRしなくてもいい。

岸：ならば顔をあわせられるとか、そういうところにメリットを作っていないと。

嶋崎：2007年8月の「特待生問題を考える」はサッカーだけではないですね。

中塚：スポーツ法学会でシンポジウムをやったんです。白井久明さんがコーディネーターの一人で、それが白井さんにつながったきっかけですが、演者の一人として私が登壇しました。

嶋崎：僕が参加した中で参加者数が一番多かったのは坂田さんのとき。2008年1月23日。隣の音楽室でやりました。

中塚：会議室は入試関係でロックされていたので音楽室でやりました。その部屋がいっぱいになるぐらいでした。「特待生問題を考える」は、進行中塚、参加者、本日の流れ…。8月4日にシンポジウムがあって、そこで深められなかった話を自由にしましょうという月例会のようですね。

笹原：ずいぶん前からほかのスポーツもやっていたと思ったけど、2009年からなんですね。

中塚：坂田さんの会は2008年1月。31人来ている。この話もおもしろかったよね。

嶋崎：僕は特に内部の人間－帝京の話。裏側も知っているから。

中塚：改めて見てみると、サロンのHPに載っている月例会報告はものすごい資料やと思う。けどどれぐらいの人が見ているのか。

笹原：ほんとに知りたいですね。

3. 20周年記念シンポジウムと広報誌について

中塚：もうちょっとだけ、今年度の「20周年記念シンポジウム」について時間を区切って話をし、中華屋へ移動して続きをやりましょう。

第1部、第2部と2部構成にするのは一つの手。それも、嶋崎さんが言ったみたいに時期で分けるやり方はある。

岸：サロンの会員で、会員以外の人に対してもよく知られている有名人に話をしてもらうのはどうでしょうか。宇都宮さんがその代表かもしれないけど。そうすると、この会にはこういう人もいるんだという PR にもなります。同窓会的な雰囲気を残しつつ、内輪で終わらないためにも。

笹原：宇都宮さんはしばらく来てませんね。この日は J リーグがあったんだっけ？ 試合があると、宇都宮さんは取材があるかも。

中塚：サロンのトップページの写真は宇都宮さんが提供してくれています。新しくなっていますね。定期的に入れ替えています。
ちなみに、川名さんがつくってくれた会員募集チラシがこれ（スライドで提示）。

川名：A4 の募集案内を 2 種類つくってみました。細かい情報を裏面にまとめてみました。

岸：このチラシにスポンサーをつけるというのはどうなのか。値段に応じたサイズで。

笹原：チラシを広告媒体にという考え方もあります。

中塚：2004 年度の公開シンポジウム報告書「toto を生かそう」は、途中から「サロン 2002 のあゆみ」が書かれている。今回作る報告書、ではなく広報誌には、こういうページが必要なのかかもしれない。

笹原：何を広報誌に入れるかから話し合いたいですね。

中塚：案内チラシの話、広報誌の話…

川名：案内チラシは何部位つくるものなのですか

笹原：あればいろんなところに使える。

岸：我々が持っている、あったときに渡せる。

嶋崎：SFT の全体会では置かせてもらった。

笹原：会員やメンバーになったときの、わかりやすいメリットは？

岸：ML ぐらいしかないのが現状です。

笹原：あとは名簿か。

中塚：バッジがもらえるとか…。目に見える形として。

嶋崎：大して意味はないけど、一つのロイヤルティにはなる。それにお金をかける意味があるかという話にはなるけど。

岸：会員募集に賛助団体も入れればよい。

中塚：ここではこれぐらいにして場所を変えましょか…。と思ったけどまだ教生がおるんや…
(しばらく雑談の後、「景宜軒」に移動)

文責：中塚義実